
キミへ～伝えたかった言葉～

美月 花音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミへ〜伝えたかった言葉〜

【Nコード】

N1913F

【作者名】

美月 花音

【あらすじ】

この春高校一年生になった主人公・森野若葉が、勉強・友情・そして恋を経験して、成長していくお話です。【現在、休載中】

第一話・若葉と真由莉

ボクは、もうすぐキミから離れてしまう。

その前に、伝えたい事がたくさんあるよ——？

今日は、私が通うことになる霜山大学付属高校の入学式。

新しい友達と、新しい恋、フレッシュ学校生活にわくわくしながら、通学路を歩いていく。

「若葉……！！！！おっはよ……！！！！」

「あっ！真由だ！ヤッホ……！！！！！！！！」

「若葉はりきってんね！！高校デビューですかあ！！」

「はりきってるかな？別にフツーじゃん？」

「それだけメイクしてればフツーじゃないって……！！」

「真由が平凡すぎるんじゃない???」

私の名前は若葉。もりのわかば 森野若葉。

今年高校一年生になる、ごくごく普通の女子高生だ。

フツーに人並みの恋もしてきたし、友達もいっぱいいる。

でも、霜月高校に通うのは、私と真由、愛実だけ。

もつとも、愛実はお姉さんがココの大学生だからだと思う。

愛実のお姉さん——あすみ 明日未さんは、美人で頭がいい人。でもあんまりしゃべらない、無口な人。

私は無口な人が苦手。だから私はあまり明日未さんが好きじゃない。もつとも、明日未さんもあたしを好きじゃないっばいけど。

真由——いたくらまゆり 板倉真由莉は、あたしの幼馴染。一番仲良しの、おてんば少女。

真由莉って言うのが長いから、真由って呼んでいる。

今ここにはいない愛実は、眼鏡を掛けたおとなしい女の子。読書が趣味で、実はヒップホップも得意だったりする、風変わりな少女。

まあ、この風変わりなところが好きだから、友達やつてられるんだけどね。

「若葉あ？どした？また空想の世界かニヤあ？」

「真由、うるさい！！引つかくよ！！」

「ごめんニヤ」

「猫缶食べる？一撃でしゃべれなくなるゴキブリ味のやつあるよ。あ、それとも垢味がいいか」

「……若葉、いつも思っけどそんなもんどこで売ってんの」

「商店街」

「……マジッすか？」

真由は時々猫口調になる。それをやめさせるために、ものすんごい味の猫缶を常備している。

もつとも、それを使ったことは一度だけ。真由が爆発したからやむなく、ね。

「若葉ー！ー！おーいてーくよー！ー！ー！ー！」

「あ、まてえ！ー！ー真由ー！ー！」

私たちは桜吹雪の中を、鬼ごっこしながら駆け抜けていった。

「でつか！ー！ー！」

今は高校の目の前。

言葉通り、この高校・・・ハンパナクデカイ。

まあ、大学の付属高校だから、大きいのは仕方がない。

でも・・・

「真由、この高校、でかすぎて迷子になるんじゃない？」

「それもそうだねー。あははははー・・・・・・・・！！？」

私たちはここにきてあることに気づいた。

「ね、若葉、あたしたち、方向音痴じゃなかったっけ？」

「そうだったあ・・・・・・・・！！！！！」

そう、あたしたちは二人とも、そろいもそろって方向音痴。

このデカすぎ高校に通う者にとっては、絶望的なこと。

「どーしよっか、真由？」

「どーしもできないね、若葉？」

さっきまで笑顔だった二人が、絶望＋不安のなんとも恐怖感漂う気持ちになったのはいうまでもない。

第二話・勘違いとクラス発表

「真由〜！そっちにあつた？」

「ないよ〜！愛実！そっちは？」

「ナッシング！！」

「やっぱり？」

今はクラス発表掲示板を私と真由とさつき合流した愛実の三人で見ているところ。

なにセクラスが多すぎるから、私と真由と愛実の三人で手分けして見てるんだけど見つからない！！

探し始めて五分ほど。

「あつた！」

声を上げたのは私、若葉。

「「ホントお！！！！！」」

「うんっ！！！！！」

「なにになになになに」

何々連発発言は真由。

「えつとね」

えつと、板倉真由莉、板倉真由莉と・・・・・・・・

「真由は、八組」

「若葉、あたしは？」

「はいはい、ちょっと待って」

えつと、愛実が苗字が秋野だから初めのほうだと・・・・・・・・
あ、あった

「愛実も、八組」

「じゃあ若葉が八組なら全員一緒だあ！！！！」

「若葉は若葉は?????」

森野森野・・・・・・・・あれ？

「わくわくわくわくわくわくわく」

「・・・・・・・・あった」

「分かる？愛実」

「お腹鳴ってる」

「地獄耳だね」

「・・・ふん」

「まーまーそう怒らないの」

私と愛実を真由が止めた。

「そろそろ入学式始まるから、クラスいこーよ！時間あつたら、隣のクラスとかも見物に行きたいし」

「「そうだね、いこーか！ー！ー」」

「ナゼハモル！ー！ー！」

「「ノリで」」

「あっそ」

私たちはちよつとふざけながら自分の教室へ。

「九組九組と・・・あれ、ない」

私は九組どこか聞いてみた。

「すいませーん、九組って、東校舎でいいんですよね」

「あら、九組は西校舎よ、ちよつど真反対」

とんでもない勘違い。

九組と八組、実はものすごく遠かった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!

第二話・勘違いとクラス発表（後書き）

ノルマ達成！！！！（詳しくは暴力少女のあとがきで）

やったぜ！！

第三話・担がれる運命ゝそんな運命いやなこったゝ

「西校舎ってどこだ！どこだあ！」

現在私は西校舎を探して校内をうろついている。

西に行けば見つかるはずなのに、西に行くと行き止まりになる。

誰だこの学校をこんなに大きくした奴は。

ちなみに、私が西だと思っている方向が西ではなく南だということを、私は知らない。

「ドンッッッッー！」

突然、私は誰かにぶつかった。

「痛あ……！ちょっと、何すんのよ！気をつけなさいよ！」

「そつちこそ気をつけろよな！あれ、お前………九組の森野若葉か？」

「何で私の名前を知っている！！まさか変態！？ストーカー！？逃げなくちゃ！」

「マジですがなにか？」

「じゃあ、てめーはここが南校舎だって分かってるのに九組の私を見てほくそ笑んでる奴ってことかあああああああ？」

「そういうこと。後、俺は浅野拓真^{あさのたくま}。タクって呼んでいいからな。ちなみに俺も森野^{おまえ}と同じ九組だ。よろしくな、森野。」

「はあああああああああああ！？」

ちよつと、頭の中の整理タイム。

えつと、こいつは浅野拓真で、わたしと同じ九組。なぜか私が森野って呼ばれてて、向こうはタクって呼べって言ってくる……
・！？！？！？！？

「ちよつと、じょうだんじゃないわよ！！健全な女子高生の私が、そう簡単に男をあだ名で呼べるわけ無いでしょ！？」

「健全な女子高生とかそんなじゃなくて実は恥ずかしいんじゃないの？」

なんか浅野拓真——めんどいから浅野でいーや——が小さい声でつぶやいたけど聞こえないから無視した。

「ところで浅野！あんたそろそろ教室行かなくていいの？」

「お前だってそうだろ？もういいや、森野相当な方向音痴っぽいから、俺が連れてってやる。感謝しろ！」

「えっ、ちよつ、ちよつと・・・きゃあ!!」

なんと、浅野は私の体を軽々と持ち上げると、私の体を担いだ。

「なにすんの!!」

「え？走るの校則違反だから持ち上げてあるいてんの。時間短縮さ」

いや、その前にこの格好をやめてほしい。

「こんな格好しなくてもいいじゃないの!!降ろしてよ!!」

「いいじゃんちよつとぐらい。さ、行くぞ!!」

ちよつとの抵抗を試みて、じたばたしてみる。

「動くと落つことすぞ」

「むっ」

ちよつとの抵抗、失敗。

結局、私は浅野に担がれながら、教室まで連れて行かれたのだった。

第四話・浅野はプリンス？信じらんない！！

「ええええ！！！！」

今は放課後。別のクラスの愛実&真由と一緒に、下校中。

その中で私は、今日あった浅野との最悪かつ最低な出来事を二人に告げた。

「じゃあ若葉は、初対面の男子に、時間がないからっていう理由で教室まで担がれたってこと！？」

「そーいうことです！！もう、浅野って、デリカシーろくでなし男よ！！あんなやつもう大っ嫌い！！」

私が二人に愚痴ると、真由と愛実は、こう言った。

「そいつってさ、 “あ の” 浅野拓真様？」

「はあ？なんでそいつに様付けしてんの？ってか私そいつの名前言うてないし！！」

私がそう言つと、二人はまたまた声を合わせて、とっても信じられないようなことを言った。

「だって、うちのクラスじゃ有名だもん。『麻倉中学のプリンス・浅野拓真』はさ。ライバルはうちだけで二十人ぐらい？」

「はあああああ！？」

麻倉中学のプリンス？なんであいつがプリンスなわけ？あのデリカシー無しのろくでなし男があ！？

ってか二十人ってほとんど女子全員じゃん！！

そう言いたいのを必死にこらえて、私は言った。

「あのデリカシーまるで無しのろくでなし男の、どこがいいんだろーねえ？」

「そこがいいんじゃない！！鈍感で、優しいお方だからよ！！」

ちよいとそこのお二人さん。なぜにあの浅野拓真ろくでなしおとこにむかって、『お方』などというんでしょうか？

ってか今は鈍感もモテるステータスなんだ。覚えとこ。

「真由、愛実、目を覚まして！！あいつはそんなやつじゃないよ！
」

「目を覚ますのは若葉のほうだよ！！あんな素敵なお方なのに、どうして嫌いになることがありましようか！！ああ、拓真様、あなたは どうして拓真様なの……」

夢見る口調で言う二人に、私はもう呆れ顔。

つてか最後の言葉って著作権……だいじょぶだね、うん。

「とにかく、私はあんなやつ大っ嫌いなんだからあ！！」

「えゝ、気が変わるなら今のうちだよ」

なんか残念がつてる二人を置いて、私は走り出した。

「若葉ゝそんなに照れなくてもいいじゃん」

「照れてない！！」

「またまたあゝ」

「もう、知らない！！」

——浅野なんて大嫌い——この気持ちが、いつか変わることを。
とになる。

そのことを、今の私はまだ、知らない。

第四話・浅野はプリンス？信じらない！！（後書き）

今回はちよっぴり短めです。

浅野と若葉はどうなるんでしょうか！？

次回、乞うご期待！！・・・されてもなあ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1913f/>

キミへ～伝えたかった言葉～

2010年10月12日05時08分発行